

教育センターだより

～第105号～



令和6年3月1日発行

佐野市教育センター

佐野市上羽田町1134番地1

☎ 20-3108

20-3048(相談専用)

「窓ぎわのトットちゃん」から思うこと

佐野市教育センター所長

◇はじめに

「窓ぎわのトットちゃん」映画化の話聞き、久しぶりに本を読み返しました。1年生で小学校になじめず退学になったトットちゃんが、トモエ学園で小林宗作校長先生と出会い、自分の個性や友達との違いを肯定的に受け止め、自分らしくのびのびと成長していく姿を描いたこの本を読むと、いつも温かい気持ちになります。初めて読んだのは高校生の時。教師を志していた私は、「君は、本当は、いい子なんだよ。」とトットちゃんにいつも言ってくれた小林校長先生みたいな先生になりたいと思いました。今、改めて読み返してみても、「トットちゃんのような個性や特性のある子は、今でもどの学校にもいる。自分は果たして、小林先生のように、その子の『いい性質』を見つけて伸ばせるような関わりができていだろうか。」と思いました。

◇多様な教育的ニーズへの対応の重要性と難しさ

義務教育段階の素直で柔軟な心をもった子供たちにとって、友達や先生、地域の人など多様な人々との様々な関わりを通した学びは、精神的・身体的な能力の可能性を伸ばし、その子の未来にもつながる大切な経験です。そして、子供の学びを充実させるためには、障がいのあるなしに関わらず、全ての子供に対する一人一人の能力や特性に応じた指導・支援を工夫・改善し、子供が本来持っている力を最大限に発揮できるようにすることが重要です。

一方で、多様化する教育的ニーズに対応することは、決して簡単なことではありません。その難しさを感じ、どのように指導し支援したらよいか、日々悩みながら子供たちと向き合っている先生方も多いのではないかと思います。

◇特別支援教育推進のキーワード

佐野市教育センターの特別支援教育調査研究委員会では、令和3～5年度の3年間、「通常の学級におけるインクルーシブ教育システムの推進」に視点を当てて調査研究を進めてきました。この研究を通して、通常の学級における特別支援教育推進のキーワードが見えてきましたので、御紹介します。

①合理的配慮

- ・児童生徒の実態や教育的ニーズに合わせた支援

②教育のユニバーサルデザイン

- ・ユニバーサルデザイン化された授業の工夫
- ・安心して生活できる教室環境の整備
- ・居がいのある温かい学級づくり

③チーム学校

- ・教職員間の情報共有と連携、研修の充実
- ・保護者や専門機関との連携

詳しい研究内容等につきましては、今後発行予定の研究紀要をぜひ御覧ください。

◇おわりに

黒柳徹子さんは「あとがき」で、『トットちゃんみたいな女の子でも、まわりの大人のやりかたによって、なんとか、みんなとやっていける人間になれる』と書いています。前の学校では落ち着いて学習に向かうことが苦手だったトットちゃんは、トモエ学園で様々な個性ある友達や自分の個性を受け止めてくれる先生方と過ごした数か月後、机に座って勉強し、友達と楽しく遠足に行けるようになっていました。約80年前のトモエ学園では、前述の①～③の取組が既実践されていたのかもしれない。

令和5年度 佐野市教育センター調査研究委員会の研究概要報告

《学習指導調査研究委員会》

研究主題

「主体的・対話的で深い学びを実現するための
|人|台端末の活用について ~今すぐできる!
教師も子供も学びやすくなる端末活用術~」

先行き不透明な予測困難な時代を生きる子供たちには、自ら課題を見付け、解決し、よりよい社会や人生を切り拓いていく力が求められています。そのため私たち教師には、学校における基盤的なツールであるICT機器を最大限に活用しながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を通して、学習指導要領を着実に実施していく必要があると思います。

|人|台端末が、子供たちの学びの選択肢を広げ、主体的な学びを実現する手立てとなり得るため、学校現場では各種研修や授業実践を通して多くの取組がされています。しかしながら、|人|台端末の活用場面や活用方法について、依然として様々な疑問や不安の声があるのも確かです。「より学習活動を充実させるためには、どのような活用法があるのか」、「忙しい中では、なかなか新しい活用法に取り組むことができない」と思っている先生方は、少なくないのではないのでしょうか。

そこで本調査研究委員会では、教師が無理なく、そして子供たちが意欲的に学習に取り組めるような|人|台端末の活用法を考えることにしました。様々な活用法について話し合いを重ね、実践し、効果が見られた取組を「GIGAスクールかわら版」で情報発信してきました。

本研究が学習指導要領の着実な実施に向けての|人|台端末活用のヒントとなり、ICT機器の活用を通じた「主体的・対話的で深い学び」となる授業改善に役立てていただければ幸いです。



学習指導調査研究委員会
委員長

《特別支援教育調査研究委員会》

研究主題

「通常の学級におけるインクルーシブ教育システムの推進 ~一人一人を大切にし、子供が安心して過ごせる学級集団づくりを目指して~」

児童生徒の自立や社会的参加に向け、児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、持てる力を高めていくことができるように生活や学習上の困難さを改善できる適切な指導や支援を行う必要があります。

改めて児童生徒の学校生活の様子を振り返ると、登校から下校するまで多くの活動を行っていることに気付かされます。学習、当番活動、係活動、校外学習、部活動、行事への参加など、それぞれの活動を通して、日々学び、様々な力を身に付けていきます。しかし、いつもスムーズに活動が進んでいくわけではなく、授業中にもどのように活動をしたらよいか分からずに困っている子、自分の気持ちをうまく伝えられずトラブルになり落ち込む子など、学校生活の中で感じる一人一人の困り感は様々です。

そこで、本調査研究委員会では、通常の学級におけるインクルーシブ教育システムの推進を図るために、児童生徒の実態やニーズに合わせて、どのような支援ができてきているのかについて研究しました。一人一人の児童生徒が安心して過ごすことができる環境づくりを行うためには、学級集団の安定が必要だと考えたからです。

学校現場では、児童生徒が抱えている困難さの解消を目指して様々な取組が行われていますが、児童生徒一人一人を大切にしたい支援の仕方は様々であり、教職員の特別支援教育に関する専門的な指導方法の向上が求められています。様々な実践事例を教職員で共有することで、通常学級におけるインクルーシブ教育システムの推進につなげられるようにしていきたいと思えます。



特別支援教育調査研究委員会
委員長

※ 詳細は、調査研究委員会の研究紀要(第51号)を御覧ください。

令和5年度「アクティブ教室」の活動状況

アクティブ教室では、「安心して過ごせる居場所づくり」と、個や集団での学習・体験活動等を通して「自ら動き出そうとする力や社会的自立の基礎となる力を身に付けること」を目標としています。

その目標に向けて、選択できる学習スペース、ワークブック・1人1台端末・図鑑など自分のペース・内容・方法で行う学習タイム、みんなで話し合い決める共遊の時間、共同制作や調理実習、農園活動、地域の方や他地区の通級生との交流など、心安らく環境づくりと多様な活動の工夫に努めているところです。

今年度は、アクティブ教室「さの学」に取り組みました。これまでも地域の方との交流や地域散策などは行っていましたが、佐野に関する人・もの・ことに触れ、調べ、体験する「さの学」として5つのテーマを継続して行うことで教えてもらうという受け身の学びから、徐々にクイズを作ったり、質問したりするなど主体的

なものになってきた気がします。「さの学」での学びが、佐野の子である自分自身を見つめ、自分を好きになるきっかけになってくれたらと思っています。

先日行われた「みんなのミーティング」では、アクティブ教室や新設されるマイルームをより良いものにするための提案や意見を自分の経験を踏まえながら率直に建設的に述べている姿、傾きながら他の発言を聞いている姿が見られ、通級生の嬉しい成長を感じました。

現在、アクティブ教室に通級している児童生徒は、9～15歳の21名(R6年1月末現在)。

今後も、在籍校の先生方、保護者の皆さんと連携しながら、通級生が心のエネルギーを貯めて自信をもって動き出せるよう、一人一人を大切にした「個」と、幅広い異年齢の「集団」の両面の良さを生かした支援に努めていきいと思います。



令和6年度から不登校児童生徒の学び場「マイルーム」が開設されます！

不登校児童生徒及び保護者支援のさらなる充実を図るため、上羽田町にあるアクティブ教室に加え、令和6年4月から戸室町のためま保育園北側(現田沼シルバーワークプラザ)に「マイルーム」が新設されます。また、学び場の総称が「不登校児童生徒支援教室」から「みんなのまなびば」に変更されます。従って「みんなのまなびば『アクティブ』」と「みんなのまなびば『マイルーム』」の2カ所となります。

現在、アクティブ教室では学校と連携しながら登校に不安や悩みのある児童生徒が安心して過ごせる居場所づくりに努めるとともに、児童生徒一人一人に応じた多様な学びや体験的活動、相談等を通して社会的自立の基礎となる力を育めるよう支援をしています。一方で、近年の不登校児童生徒数の増加に伴い、アクティブ教室の通級児童生徒数も年々増加傾向にあります。また、現在のアクティブ教室は市の最南部にある教育センター内に設置しているため、特に市

北部地域の保護者の送迎にかかる負担が大きな課題となっていました。そこで、この課題を解決するため、市の北部地域に新たな教室を開設し、不登校児童生徒の学びの機会の保障に努めていきます。

4月の開設に向けて児童生徒や保護者等を対象とした施設の見学会を、3/19(火)と25(月)に、体験会を23(土)に実施いたします。



今年度の教育相談内容・相談者数・相談回数について

平成6年1月末現在

学校種別 相談内容	幼児	小学校							中学校				高校 その他	合計	電話	直接	
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	不明	1年	2年	3年	不明					
1 不登校	新規人数		2	5	5	2		1		6	4	1		1	27	20	7
	延べ回数		4	7	5	3	1	1		15	13	7		1	67	33	34
2 集団への適応	新規人数				1										1	1	
	延べ回数				2	2	9	2			1				34	10	24
3 ことば	新規人数	1	1												2	2	
	延べ回数	1	1												2	2	
4 学業・進学就職	新規人数										1			1	1	1	
	延べ回数				1					1	1			1	4	3	1
5 情緒	新規人数			1							2	1			4	3	1
	延べ回数			1	1			8	2		2	4			19	3	16
6 非行	新規人数																1
	延べ回数																1
7 教育一般	新規人数	3	1	1	3	4	3	5		6	2	1	1	1	31	26	5
	延べ回数	4	2	1	4	7	4	6		10	2	7	1	5	53	42	11
8 いじめ	新規人数									2		1			3	3	
	延べ回数				1					3		1			5	4	1
学年別	新規人数	4	4	7	9	6	3	6		14	8	5	1	2	69	56	13
	延べ回数	5	7	9	14	3	9	9		30	18	21	1	7	185	97	88
学校別	新規人数	4	35							28				2	69	56	13
	延べ回数	5	103							70				7	185	97	88

相談方法	新規相談の来談者内訳							合計
	父	母	本人	学校機関	※その他	小計		
電話	5	4	5	3		3	56	69
直接	2	1	0	1		13	13	

※その他は祖父母等

今年度の教育相談状況を振り返って

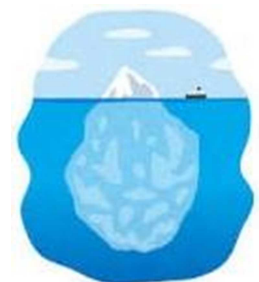


今年度の教育センターでの相談件数は、1月末時点で185件でした。令和4年度に比べ、小学生は27件、中学生は21件増加となりました。不登校児童生徒の数が全国的にも増加していますが、教育センターでも不登校、さらにはその前兆ともいえる学校生活への不適応や人間関係の相談が多い状況でした。また、「子供が学校に行きたくないと言っているが、行かせない方が良いでしょうか？」と初めに質問するケースや、まずは担任の先生など、学校とよくお子さんの様子を相談し、学校でできる支援や家庭でできる支援を試してみても増加した印象があります。

子供たちの不調は登校渋りであったり、身体症状であったり、友達や先生とのトラブルであったり、色々な形で訴えられますが、主訴とし

て前面に出ているものの背景には、安心できない環境、学習面のつまずきや失敗体験の積み重なり、発達段階や発達特性、繊細さ、家族の事情、生活リズム、サポーターの有無など、様々な要因が関係しているかもしれません。まずは、お子さんや保護者の方の主訴に寄り添い、支援することが重要となりますが、お子さんの状況は一人一人違うので、様々な情報をもとにしっかりとアセスメントし、チームで支援をしていくことが大事かと思えます。

教育センターは学校と連携して、一緒に考え、支援してまいりますので今後ともよろしくお願いたします。



冰山モデル

あとがき 寒さが和らぎ、花の便りも聞かれるようになりました。佐野市教育センターの本年度の事業も計画どおり終了する運びとなりました。皆様の御理解と御支援に心から感謝申し上げます。新年度もどうぞよろしくお願いたします。

